

## 日本の方言研究にみる富山県

—大田栄太郎と佐伯安一を中心に—

真田信治（大阪大学名誉教授）

### ●はじめに（佐伯安一さんとの邂逅）

大学の学部時代は近代文学を志していた。テーマは石川啄木研究にしようなどと考えたこともあった。しかし、休暇でふるさと（旧上平村）に帰省していたある日、偶然に手にした本によって、やってみたいと思うことが一変した。その瞬間をいまでも鮮明に思い浮かべることができる。それは、佐伯安一著『砺波民俗語彙』（高志人社、1961）という方言集であった。方言による生活実態の活写という興味深い内容もさることながら、そのデータ採録の範囲について、「ここに集録した語は富山県の西部、砺波市・東礪波郡・西礪波郡で使われている民俗語彙を中心とした方言である。但し五箇山（東礪波郡平村・上平村・利賀村）の分は除いた。採集が少ないのと、ここは文化圏からみて砺波と異質的であるため。将来ここだけを範囲とした方言集が編まれるべきだと考えたからである。」とあったからである。五箇山出身者として、それならばやってみようという気持ちがわきおこってきたのであった。そこで、この書の記述にならい五箇山方言の接辞についてまとめ、近代文学のサークル同人誌に載せたのが私にとって最初の方言レポートとなった。

国立国語研究所に勤め始めた頃、上司であった飯豊毅一部長から、理想の方言集を選ぶようにとの下命があった折、まさきに挙げたのはこの書であった。飯豊氏の推薦によるのだと思われるが、この書が、副題に「富山県砺波方言集」と銘打って、国書刊行会から復刻再刊されたのは1976年のことである。この書は、特に生活領域の分類において、また語彙の排列において方言集のモデルとなるものだとする私の評価は今も変わってはいない。

2002年に出版された、佐伯さんの研究の集大成ともいえる『富山民俗の位相』（桂書房）には、次のような記述があって驚いた。

「昭和29年の暮れ、私は無謀にも職を捨てて上平小学校成出冬季分校の教員になった。五箇山の民俗調査を一生の仕事にしたいと思ったからである。山に住んで、上平中学校長をしながら『五箇山民俗覚書』を書いた石田外茂一さんのことが頭にあった。しかし、そのころから教員の門が狭くなって、五箇山生活は一冬で終わった。」

私が上平小学校（本校）に入学したのは昭和27年である。佐伯さんと私は古くから接点があったのだ（資料1：参照）。

（真田信治著作選集1「標準語史と方言」ひつじ書房、2018から）

## ●日本における言語地理学の揺籃

「言語地理学」という学問の日本での黎明をつける論文は、民俗学者、柳田国男の「蝸牛考」である。「蝸牛考」は1927（昭和2）年に書かれた。最初、雑誌論文（「人類学雑誌 42、4-7」）に発表されたのであるが、その論文の冒頭の部分、それが富山県の方言のバラエティから書き起こされているのである。その一部を引用してみよう。

私は現在のところ、まだ我邦の方言のほんの一部しか尋ねて見たのでないが、もう手帳に書き留めた蝸牛の名が、夙くに二百を超えて居る。八、九年以前に出た『富山県方言』といふ書物に依れば、越中の一国だけでも、現に行はれて居るといふものが十八あり、昨年田村栄太郎君が、新たに实地に就いて採集した数は、それよりも更に五つ六つ多かった。其分布の実状を明らかにする為には、最初に此地方の例を挙げて置くのが寧ろ簡便なやうである。近い方から順々に並べて見ると、

ダエロ：下新川郡入善町付近／ツロロ：同上／カエツブリ：同上／カエツモリ：同上  
／ツドロガエドロ：同郡経田村付近／ダエロダエロ：同愛本村辺／メンメンカエボ：中  
新川郡大岩村辺／メヨメヨツノダシ：同郡上市町付近／カエカエツブリ：上新川郡針原  
村辺／カエカエツモル：同上／カエボボ：婦負郡北部／カエカツギ：同郡音川村辺／メ  
ンメンカエブツ：高岡市近在／メンメンカエボコ：射水郡海老江村辺／マエマエ：氷見  
郡神代村辺／カエカエツノダス：同郡宇波村辺／カエツブリ：同上／デンデンガラムシ：  
同郡氷見町付近／カンツンブリ：東礪波郡五箇山／ツノツノミヨミヨ：同郡井ノ口村／  
ツノダシメヨメヨ：同上／デンデンムシムシ：同郡出町付近／メヨメヨツノダセ：同上

この文中「田村栄太郎君」とあるのは、富山市出身の大田栄太郎のことである。大田は、昭和の初期、中央の方言研究界で活躍した人で、旧姓は田村であった。私の調べたところでは、昭和6年の論文から大田となっている。いずれにしても、柳田が富山県方言の記述から書き起こしていることが注目されるのである。

## ●大田栄太郎の略歴

上掲、柳田の論文「蝸牛考」は、1930（昭和5）年に単行本『蝸牛考』になるのであるが、そこでは上掲の文章、富山県方言の記述部分は、実はカットされてしまっているのである。しかしながら、上記のように、大田栄太郎の採集によって得られたデータが柳田の考察において大きな影響を与えたであろうことがうかがわれるのである。

大田栄太郎は、1899（明治32）年の生まれである。戦前、帝国図書館（現：国立国会図書館）の館員として勤めていた。その間、各地の方言関係の文献を渉猟、収集した。後に、著書『郷語書誌稿』（1983、国書刊行会）で、「帝国図書館にいた頃は、郷語文献を知るこ

と、それを求めることが唯一の楽しみであった。いわば道楽であった。そのためには当時納本される図書はいうに及ばず、地方の校友会雑誌、同人雑誌にも広く手をのばして殆ど病的に集めた。一点でも逃すまいとして、帝国図書館でも同僚で教えてくれた人には必ず一点につきコーヒーを一杯出す、というようにして蒐めたものである。」と記している。戦後は郷里の富山市に帰り、富山県立図書館長、富山大学講師などを歴任、1988（昭和 63）年に死去した。戦後、国立国語研究所の創設に際して、長年収集してきた大量の方言書・郷語書類を研究所に寄贈した。国語研究所で「大田文庫」として所蔵されている。「大田文庫」は、研究所の誇るコレクションの一つとして方言研究者輩出の大きな力となってきた。

### ●『郷語書誌稿』について

大田栄太郎著『郷語書誌稿』の「はじめに」と「後がき」には、実は、少し“怖い”ことが書かれている。その部分を抜き出しておこう。

昭和 20 年、富山県立図書館の図書疎開後（同年 8 月 1 日戦災により全焼したが）、... 被害は最小限に食いとどめた。けれども、十分の食料もなく疲労がたたってか、全く健康を害したのと、もう一つはそのずっと前から家内も病床にあって、われ等一家の生活状況はすっかり変わってしまった。

従来、多少集めていた方言書・郷語書類も、そうしたいろいろの事情と、一つは後でわかったのであるが、一種の畏ともいえる実に巧妙な、しかも強引な話しに引っかかって、全く泣きの涙で、そうした資料を全部手離したのである。...

以前に帝国図書館にいた頃は、郷語文献を知ること、それを求めることが唯一の楽しみであった。いわば道楽であった。...次第に病い膏盲に入り、幸い家内も度し難いものとして、全く諦めてくれてはいたものの、世の主人からすれば困った親爺であったわけである。私は本を敷布団とし、掛布団も本にし、その中で往生遂げたいと念じていたのであった。そうした命がけての本を譲渡して終わったのであるから、馬鹿といえば馬鹿、全く河童の岡上りで、今となってはもう頭の鉢の水が渴れては芸の仕様もない、...

ところが昭和 30 年も過ぎると、またもとの道楽の芽が、どこからともなく吹き出し始め、以前に多少集めていたものをまた借用して見たり、新たに購入したりして、また読み直して見たくもなって、...

「一種の畏ともいえる実に巧妙な、しかも強引な話しに引っかかって、全く泣きの涙で、そうした資料を全部手離したのである。」との言辞が気になるところである。しかしながら、このあたりの事情について、大田氏にうかがう機会は訪れなかった。

## ●大田栄太郎と佐伯安一

私が大田栄太郎氏に最初にお会いしたのは、国立国語研究所に勤め始めた1975年の5月19日のことであった。この日、大田氏は、自分の手離した資料の再検索のために「大田文庫」を訪れられていたのである。その時の話し合いのことが鮮明に思い出される。

大田氏は、「方言研究がまた新たに再興しつつあることを大変うれしく思っている。戦前の方言研究界の興隆を想いつつ、感慨無量である、云々。」とおっしゃった。

その折に、冒頭に記した佐伯安一さんの『砺波民俗語彙』の復刊に関する御意向を伺ったのであった。大田氏からは、「自分は、その本の初版で序文を書いている者である。貴重な資料なので是非ともよろしく願いたい。」とのことばをいただいたのである。

その時点で、郷土の先達、大田氏と佐伯さんとが、私の中で繋がったのである。

なお、1978年6月30日、富山市大町にあった大田氏の御自宅にお伺いした折、大田氏から五箇山出身の高桑敬親氏による自筆ノート「民俗学的・土俗学的にみた五箇山方言」（昭和14年9月執筆）を譲り受けることとなった。

その自筆ノートを、私の主宰する近畿方言研究会の「地域語資料」2として公刊したのは、1996年6月のことであった（資料2：参照）。その冊子を謹呈した折の佐伯さんからの手紙の抄録を掲げておく。

紅葉も盛りを過ぎ、日に日に冬近きを感じます。このたびは高桑敬親さんの遺稿を翻刻ください、ありがとうございました。高桑さんの内省と認識による五ヶ山方言の記述と分析はまことに貴重であります。「上流」と「下流」の方言や地域性の記述も面白いものです。さっと一読しましたが、もう一度高桑さんの心のひだをなぞりながらゆっくり読みこんでみたいと思います。小生、この春、砺波郷土資料館を退職いたしました。『砺波市史資料編』五巻の刊行を終えたことと、後進に道を譲るためです。一つは自分の仕事のまとめをしたいと考えたのですが、まだ頼まれた仕事が山積していて、かかれそうにもありません。（中略）田舎におりますと、村の診療所みたいなもので、外科も内科も小児科もなんでもこなさなければなりません。早く片付けて、富山県の民俗の見なおしをしておきたいのです。『富山民俗の位相』という題まできめているのですが、いつになりますことやら。愚痴めいてしましまして申し訳ありません。

向寒の折から、御自愛の上、御精励のほどを念じております。

1996,12,2

## ●佐伯さんとの35年

ところで、佐伯さんとの交流の期間は35年に及ぶ。

1981年度から文化庁による富山県の方言収録事業が開始された、その前年度、国立国語研究所で1981年度から3年間にわたって実施される予定の数県の担当者との会議が行わ

れた。その会議に、私は、国語研究所で実施した方言談話資料での調査に基づいて、文化庁の録音文字化調査での具体的な手順についてのアドバイザーとして参加した。

その会議に富山県担当の主査として佐伯さんが参加していらっしやった。佐伯さんとの直接的な深いかかわりが始まったのは、この時からである。

1981年5月26日、富山県教育委員会の主催で、資料収集の対象地区の担当者との実施調査の打ち合わせがあった。佐伯さんと一緒に、今後のスケジュールについて会議で説明したことが懐かしく思い出される。

この事業での調査経験を踏まえて、佐伯さんは、1984年度から1986年度まで高岡市教育委員会主催の婦人ボランティア活動研究講座での方言調査コースを担当なさり、受講生とともに、次の3篇を編集、刊行なされた。

『高岡の方言』第1集（語彙） 1985.3

『高岡の方言』第2集（方言分布図） 1986.3

『高岡の方言』第3集（自由会話） 1987.3

この3篇は、『砺波民俗語彙』に続く、佐伯さんの方言研究の分野における重要なお仕事として特出されるものである。

2015年に、日本方言研究会が創立50周年の記念事業の一つとして、ここ「となみ散居村ミュージアム」において、富山大学の中井精一さんの企画運営のもとに、サマーセミナーを催すことになった。そのプログラムの中で、2015年8月17日、佐伯さんの講演が行われたのである。題目は「方言・民俗と70年」であった。なお、この講演での内容については、佐伯さん自身が、「民俗研究七十三年」（『常民へのまなざし 佐伯安一先生米寿記念文集』桂書房、2016,2.2）において、その主旨を記している。

さて、そのすぐ後の、2016年2月28日、私は、この「となみ散居村ミュージアム」での講演で、当地の屋敷林の名称「カイニョ」の語源について、私見を披露したのであった（資料3：参照）。

その講演の後で、聴衆のなかのある方から、「佐伯先生も、かつてニオ<稲塚>と関係があるのではないかと思う。ただ、史料がないので、書いてはいないが。」と、おっしやっていたというお話をうかがった。

確実な史料（資料）のみに基づいて記述をする、史料に基づかずに主観的に推測することは絶対に忌避する、といった佐伯さんの研究に対する誠実な姿勢、科学的研究者としての佐伯さんの矜持をこのことで改めて思い知ったのであった。

そのうえで、史料に基づく私の見解をどのようにお考えになるのかを是非確認したいものだ、と思っていた矢先の2016年8月3日、突然、佐伯安一さんの訃報に接したのであった。まことに残念無念、悔しいとしか言いようがない。

## 【資料：1】 石田外茂一（いしだともいち）について

石田外茂一は、1901年、金沢市の生まれ、東京帝国大学英文科を卒業後、開成中学の英文学教師としていたが、1945年3月の東京大空襲を経験し、ある意志をもって五箇山（上平村）に移住。家族で山中の生活を支えあいながら、戦中戦後の約5年間に教員として五箇山で過ごし、村人の啓蒙に尽くした人物である。勤務校で私の母の上司でもあった。

その間に石田が著した『五箇山民俗覚書』の一部が、翁久允氏主宰の雑誌『高志人』に、昭和25年から2月号から昭和27年11月号まで、3年近くにわたって掲載された。

ここでは、石田外茂一による幻の小説『弥右衛門宛五箇山消息』の一節（昭和21年8月24日の記事）を紹介しよう。私のふるさと五箇山を舞台として、73年前、筆者の生後ちょうど6ヶ月目の日に書かれたものである。

庄川からは春夏秋一冬をのぞいた三季には、川筋一面モーモーと霧が立ちこめるのです。そして対岸の、あのコブコブした丸っこい山山一山峡独特の量感を現したコブ山の連なるツギ目ツギ目の谷合いから、ムラムラと煙るのは、雲か霧か、コントンとして刻々に生動してやまぬのです。創世期に生きている心地です。さしづめ私は旧約聖書のノアですネ。

私は本当にノアなのです。

満州国ができた時、擬似国家がデッチあげられたと言って同席の人に憤慨された私です。戦中は実に生きにくいことでした。南京を占領して旗行列提灯行列が行なわれた時、この戦争は、昆虫の進軍だヨと言って、これまたひどい目にあいました。だが全くその通りだったんですヨ。南米だかの大蟻が移住しはじめると、その通過する処、一木一草をもあまさず、牛馬をも食いつくし、大河あれば、先ず先頭の一匹が飛び込み、つぎの一匹が、それに取っつき、更につぎの一匹が取っつき、という具合にして、団々たる蟻の大塊となって、コロコロと大河を転げ渡り着き、生き残った者が上陸前進し、遂に全滅するという。全くそれですネ。その本能的で無計画なところは、必勝の条件なんか一つありません。私には今更新聞なんか見て一喜一憂する必要はありませんでした。私は予言しました。その度にヒドイ目にあいました。しかも予言は一いち当って行きました。私は家族に、私はノアだ、新しい世の中がはじまる、その祖先になるのだ、ともに箱舟に乗れと厳命しました。箱舟は東京の地を離れて富山市に一時碇泊して後、この地に着きました。降伏が報ぜられた昨年八月十五日、私は、水が低きにつくがごとく、来るべき時が来たというほか、今更何の感慨もありませんでした。人びとが驚き怒り嘆き悲しむ中であって、ただ独り、静かに、私が人を殺すことなくして戦争が終わったことを、熱烈に感謝しました。

だが、まだ洪水は、終わったものではありません。

この記事は、私の手許にある石田外茂一による原本を謄写した冊子に拠った。冊子は母が石田から直接に譲り受けたものである。

石田は、この冊子の「あとがき」(1970年10月)で、「この作品は散文詩のつもりですが内容は事実です。幻想的な部分も、少なくとも私が幻想したのだということは事実です。斎賀弥右衛門氏に宛てた実際の手紙がもとをなしています。(氏は)当時の旧制砺波中学校の先生です。」と記している。

旧制の砺波中学は、私の出身校「砺波高校」の前身である。

## 【資料：2】 高桑敬親著「民俗学的・土俗学的にみた五箇山方言」の一斑

〈下梨以北の下流地方(利賀谷・小谷)の人は、〉川底は深くとも、山頂山腹に住んでいる為に大空が広く眺められ、谷底の下界を見下ろすことが出来るので人間が明るく朗らかに出来ている。奥平村の谷底に住んでいる無口で陰うつな者とは違い、機をみて転向するに長じ、人の心を外らさず、外交的で駆引きに長じ雄弁である。(中略)東京、大阪の資産家や金満家を動かして事業を起し、不成功になっても必ず斯くなるまでの理由をつけて、自分は裸で物落とさずと言う方である。世の人は五カ山の山猿だと見くびり、又、純朴と信じたら飛んだ間違いが起る、忽ち、裡に没し、今日は炭焼き、明日は都言葉に山高、金縁眼鏡の紳士に早変わりする。

### 〔礪波の町里の訛り〕

カ行＝カクのク(柿の木)、クン(釘)、スリコン(すりこぎ)  
サ行＝スナ物(品物)、ズクス柿(熟し柿)、吊ス柿(吊し柿)、スブイ(渋い)  
タ行＝モツ(餅)、ツルトル(塵取)、ツガイ目(違い目)、スツリ(七里)  
ナ行＝カンの横ばい(蟹)  
ハ行＝カブ(黴)、サブ(錆)、タブ(足袋)、ヘーブ(蛇)  
マ行＝アン(網)、ハナガム(鼻紙)  
ラ行＝ヨーサル(夜)、クスル(薬)、ヤッパル(矢張り)、キウル(胡瓜)

## 【資料：3】 「カイニョ」の語源

「カイニョ」の語源については諸説がある。一つは「垣内」由來說で、樹木などで囲まれた屋敷地の名称である「垣内(かきと→カイト)」が転訛して「カイニョ」となったとするものである。しかし、「ト」が「ニョ」に音韻変化することはない。ちなみに、富山では垣外(家の外庭)がカイトと称されていて、それは県の全域に分布している。

もう一つは「垣根」由來說で、屋敷の囲いである「垣根(かきね→カイネ)」が転訛して「カイニョ」となったとするものである。カイネの形は確かに近世の文献に見える(下記参照)。しかし、「ネ」が「ニョ」に変化するのも直接の音韻変化としては不自然である。

一方、志田延義氏は、「カイニョ」に「垣繞」の字を当てる（「北日本新聞・投稿欄による」。「繞（にょう）」にはくまとう、かこむゝの意味があるので魅了はする。しかし、民衆に一般的ではない字音が、かつ漢籍に出典のない湯桶読みの語が語源であるとは到底考えられない。

なお、富山県の東部域（呉東）では「カイニュー」と発音するところがあり、それに対して「垣入」の字を当てる人がいる。

私は、「カイニョ」は、「垣根（カイネ）」の「ネ」が、当地での〈稻塚〉を表わす「ニョ」繞という語形に牽引されて生まれた類音牽引形ではないかと考えている。

私の調べたところでは、近世の文書に、屋敷内に植える木を「稲架（はさ）」として使用した例が見えるのである。それは、婦負郡中沖村（現・富山市呉羽町）の島倉家文書である（「元禄十四年五月、田地割の割替えなど争論につき内済納得証文」富山県立図書館蔵）。そこには、下記のようにある。

（高瀬保編『富山県十村嶋倉家文書』19による。「より」は変体仮名、下線筆者。）

- 一、次右衛門屋敷ニ与茂三郎方より植置申木、田地割定書ニ相違、善兵衛はさのかまいニ罷成申旨及御断ニ申儀、与茂三郎方よりはさニ而ハ無之、次右衛門屋しきのかいねニ而御座候と申ニ付、則是以後与茂三郎方より稲懸申間敷旨納得仕相済申候、則木数式十三本之内東より六本置ニ三本、来春右日切ニ与茂三郎こき取申極ニ御座候
- 二、四郎兵衛屋敷ニ善兵衛方より植置申新はさ、是又田地割定書ニ相違、与茂三郎はさの構ニ罷成申ニ付、来春同日切ニ不残こき取申極ニ御座候之事

（一、次右衛門屋敷に与茂三郎が木を植えたのは田地割定書に違反し、善兵衛稲架に差し支えることを善兵衛が訴えた。与茂三郎が、それは稲架ではなく次右衛門屋敷の垣根であることを申し述べ、稲を架けないことで話がつき、二十三本のうち、六本おきに三本ずつ来春までに切り取る事となった。二、四郎兵衛屋敷に善兵衛が新しく稲架を作るために木を植えたが、これまた田地割定書に違反し、与茂三郎の稲架に差し支えることになるとして、来春までに残さず切り取ることが決められた。）

実は、福井県武生市には「稲架」のことを「ニョ」と称するところがある。したがって、「カイニョ」は、「藁にお」の「にお」に応じた「垣にお」なのではなかろうか。

なお、「にお〈稲塚〉」は当地（呉西）では「ニョ」であるが、呉東では「ニュー」となる。この音対応も「カイニョ」と「カイニュー」の対応と一致する。このことは「カイニョ」の「ニョ」が〈稲塚〉とかかわっていることの証左となるであろう。

（ちなみに、井波の荒木光雄氏が、かつて「北日本新聞」紙上に私見と同様の解釈を記していることを最近知るにいたった。）

（了）